

臨床看護師の医療通訳者の活用に関する認識と実践

○嶋田 みのり（浜松医科大学医学部附属病院）、佐藤 柚希（静岡県立総合病院）

濱井 妙子（静岡県立大学）

I. はじめに

在留外国人数の増加に伴い、医療の場では言語が多様化しており、医療者の7割以上が外国人患者に対し言語面で困難感を感じた経験がある。言語的障壁の克服には訓練を受けた医療通訳者の活用が推奨されている。本研究では、臨床看護師を対象に、外国人患者に対する看護ケアの実態、医療通訳者の役割の認識、医療通訳者との協働方法について明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

2023年9月27日～11月2日に、外国人患者受入れ拠点病院勤務の看護師を対象に、外国人患者ケアと医療通訳者に関する質問紙調査をWeb上と紙面にて実施した。調査項目は、言語支援サービスの活用、外国人患者に実践している看護ケア、医療通訳者の役割に関する考え、医療通訳者との協働方法、個人要因とした。看護ケア、役割認識、協働方法は5段階評定法を用い記述統計量を算出した。言語支援サービスの活用に関する自由記述は内容の類似性により整理し分類した。本研究は静岡県立大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（受付番号：学05-08（再））。

III. 結果

回答者は54人（10.7%）であった。言語支援サービスの活用経験は機械翻訳92.6%、医療通訳者88.9%、アドホック通訳者63.0%であった。医療通訳者のメリットは「伝えたいことを正確に伝えることができる」、デメリットは「スケジュール調整が難しい」が最も多かった。医療通訳者以外のメリットは利用のしやすさ、デメリットは正確性への不安が共通していた。外国人患者ケア経験者は96.3%で、頻繁に実践しているケアとして「通訳者がいなくてもコミュニケーションをとろうとする」「言葉以外の目に見える情報を収集する」が80%以上と多かった。看護師が認識する医療通訳者の役割は、12項目中「同意する」が90%以上の項目は「医療通訳者は医療チームの一員である」など5項目で、「外国人患者の不安を軽減する役割を担うべきである」が77.8%であった。逆に、「同意しない」が50%以上の項目は「曖昧な表現には、医療通訳者の判断で言葉を足して分かりやすく通訳すべきである」「患者の理解に問題があるときに限り、通訳者側から介入すべきである」であった。医療通訳者との協働方法は15項目中「必要である」が90%以上の項目は「通訳するための時間を与えている」などであった。

IV. 考察

対象機関は外国人患者受入れ体制が整備されているため、看護師は医療通訳者と協働して看護ケアを行なっていると考ええる。医療通訳者の役割について行動規範に規定されている忠実性と正確性、中立・公平、異文化理解と文化仲介、他の専門職との連携では同意をしていたが、権利擁護の認識は低く、患者の視点から行動規範を超えた不安の軽減や更なる介入から十分な理解を促す役割を医療通訳者が担うべきと認識していると考ええる。また、看護師はJuckettら（2014）があげている医療通訳者とうまく協働する方法について多く必要と考え実践していると考ええる。以上のことから、外国人患者受入れ拠点病院の看護師は医療通訳者の行動規範に規定されている役割を認識し、協働して日本人と同様の普遍的な看護ケアを実践していた一方で、医療通訳者に行動規範の範囲を超えて患者の不安の軽減といった更なる役割を期待していることが明らかになった。